鳥取の民話

65

収録・解説　酒井董美

語り手　別所菊子さん
（明治35年生まれ）
昭和61年8月22日収録

牛方や馬子　主人公さまざま

サバ食い山姥

（東伯郡三朝町吉尾）

イラスト・福本隆男

あらすじ

昔々、馬子が馬を追って八橋の町にサバ買いに行って帰っていたら、山姥が出た。「馬子殿、サバ一本ごっされ」「殿さんのサバだ、ようやらん」「なら、おまえ取って噛む」

怖くなってサバを一本やった。山姥は食べて馬子に追いつき「サバ一本ごさにゃ取って噛む」「しかたがない、みんなやらぞ」とサバを下ろしてもどっていたら、「馬の足、一本ごしぇえ」と馬も食べてしまった。

馬子が走っていたら、一軒家が見えたので飛び込んだ。「ごめんください」と声を出しても返事がない。「しかたがない。泊まらしてもらおう」と囲炉裏のアマダに上がったら、山姥の家で山姥が帰ってきた。

山姥は「餅一つ焼いて食わあかな」と餅を囲炉裏で焼いて、醤油を取りに向こうへ行った。馬子がアマダの上から棒を下ろして、餅を突き刺して上げて食べたら、山姥が醤油を持ってきて、囲炉裏をほぜってみたけれども、餅がないから、また餅取りに行った。

その間に、馬子が醤油をつきこぼいてしまった。「今夜は寝るとしょう。アマダに寝ょうか、納戸に寝ょうか。オモテに寝ょうか、いっそのことアマダに寝ょう」と上がってくる。それで馬子が怖くなってプーッと屁をひったら、「アマダは臭い。いっそお釜に寝よう」と釜の中に入って寝た。

馬子がアマダから下りて行くと、ギチギチとしむ音がする。釜の中では山姥が「ギチギチ鳥が吠える、いんまに夜が明きょうが」と言っている。馬子が山姥の寝ている釜に蓋をし、大きな石を乗せ、クドの窯に火を焚くとドウドウと燃え出した。山姥は「ドウドウ鳥が吠えるけえ、夜が明けるが」と言っていたら、釜が熱くなってきたので、「馬子殿、こらえてごっされ。部屋の隅にもオモテ（表座敷）の隅にも金がいっぱいあるけえ、みんなおまえにあげる」と叫び出した。

けれど馬子は取り合わず「馬食いサバ食いした罰だ」と火を焚いて山姥を焼き殺した。表座敷や部屋を見たら、何かの骨やなんかばっかり転がっていたのだって。こっぽり。

解説

関敬吾博士の『日本昔話大成』では、本格昔話の「逃竄譚」の中に「牛方山姥」として登録されている。東日本では牛方、西日本では馬子とか馬方が主人公になっている。しかし、これもあくまでも大勢を述べたまでで、山陰両県でも商人としていたり、隠岐島では魚屋と変化していたりする。

ところで、山姥は元来山の神であったのが、零落して妖怪化したものという。それでも神の名残をとどめているのは、主人公を試し、勇気を持って立ち向かった者に対して幸せを授けるというところではなかろうか。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。